

M-GTA 研究会 Newsletter no. 17

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：阿部正子、岡田加奈子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、林葉子、福島哲夫、水戸美津子

第 39 回 研究会の報告

【日時】 2007 年 03 月 17 日(土) 13:00～17:30

【場所】 立教大学（池袋キャンパス）10 号館 x104 教室

【出席者 54 名（会員 37 名、西日本会員 1 名、見学参加 16 名）】

＜会員＞小倉啓子（ヤマザキ動物看護短大）・隅谷理子（アドバンテッジリスクマネジメント）・都丸けい子（筑波大学）・新鞍真理子（富山大学）・渡辺千枝子（松本短期大学）・奥野由美子（日本赤十字九州国際看護大学）・標美奈子（慶応義塾大学）・亀山直子（自治医科大学）・國重智宏（上智大学）・堀内みね子（神田外語大学）・高木初子（自治医科大学）・長尾式子（東京大学）・鈴木直樹（埼玉大学）・松本賀都子（武蔵野大学）・林裕栄（埼玉県立大学）・柴田弘子（産業医科大学）・千葉京子（日本赤十字看護大学）・福島哲夫（大妻女子大学）・阿部正子（筑波大学）・山川裕子（佐賀大学）・大西潤子（日本赤十字看護大学）・納富史恵（久留米大学）・藤丸千尋（久留米大学）・清水寿子（お茶の水女子大学）・宇津木奈美子（お茶の水女子大学）・功刀たみえ（桜美林大学）・武蔵由佳（都留文科大学）・升井恵美（秀峰会）・黒岩晴子（仏教大学）・真砂照美（広島国際大学）・山崎浩司（純心会看護医療大学）・三輪久美子（日本女子大学）・坂本智代枝（大正大学）・石田多枝子（海老名市青少年相談センター）・木下康仁（立教大学）・松繁卓哉（立教大学）・佐川佳南枝（立教大学）

＜西日本＞・得津悦子（関西福祉科学大学）

＜見学参加＞

・立岡詠子（上智大学）・内田亜希（上智大学）・武重有紀子（上智大学）・江藤千晴（佐賀大学）・大畠みどり（上智大学）・鈴木依子（京都女子大学）・小池磨美（高齢・障害者雇用支援機構）・林順子（ノートルダム精進女子大学）・藤野清美（新潟大学）・松本大輔（埼玉大学）・種村健二郎（武蔵野大学）・浅田高世（九州保健福祉大学）・西原由紀乃（山梨大学）・秋田早紀子（山梨大学）・藤好貴子（久留米大学）・原田三千代（お茶の水女子大学）

【世話人会報告】

- ・ 来年度の公開研究会は、9 月 8 日（土）、札幌市の道立施設「かでる 2. 7」にて開催することになった。M-GTA の講義とペアでの分析例の説明でプログラムを構成する予

定。

- ・ 会員を対象とした夏合宿については、MLを利用して希望がどれくらいあるかを調査して開催を決定する（夏合宿コーディネーター：阿部先生）。時期は7月後半からお盆前くらい。

【次回の研究会のお知らせ】

2007年6月2日（土）13：00～18：00で、立教大学（池袋キャンパス）で開催予定です。教室などは後日、MLにてお知らせします。今回は第40回となります。また、年度最初ですので、研究会に先立ち総会を開きます。

.....

【研究報告1】

小児がんで子どもを亡くした親の喪失から再生へのプロセス

日本女子大学大学院人間社会研究科博士後期課程 三輪久美子

I. 発表要旨

1. 研究テーマ

- ①子どもとともに小児がんと闘った末、子どもの死を経験した親たちが、その後の自己及び人生をどのように再生していくのか、その内的変容プロセスを他者との相互作用の中から明らかにする（性差による違いについても考察する）
- ②そこから実践的な援助の視点を得る

2. 現象特性

二度と取り戻すことができない、自分自身のアイデンティティを支えてきた大切なものを喪失することによって、自分の人生そのものが一変する経験をした後、それからの自分自身と人生を再生していく人たち（類似例として、自分自身の身体の一部を喪失した場合など）

3. 分析テーマへの絞り込み

ある日突然子どものがん告知を受け、子どもの看病を主として自分自身が、あるいは、配偶者と同等程度担った末、子どもを亡くした親が、その後の人生を再生していくプロセス

4. M-GTAに適した研究であるか

- ・ 小児がんで子どもを亡くした親という限られた範囲の対象者のデータを扱い、その限定された範囲内における人間行動の何らかの変化と多様性を説明しようとすることからM-GTAに適していると考え
- ・ 子どものがん発病からターミナル期、死別、現在に至るまでの時間の流れの中で、子ども、配偶者、家族、医療者、周囲の人々との社会的相互作用の中で変容する内的な

プロセスを扱うことから、M-GTA の特徴である社会相互作用性とプロセス性に合致していると考え

- ・ 専門家の視点からではなく当事者の視点からの主観的経験を明らかにすることで、当事者の側に立った実践的なヒューマンサービス領域での援助を導くことを目指すことから、M-GTA に適していると考え

5. データの収集方法と範囲

調査対象者：小児がんで子どもを亡くした母親 13 名、父親 12 名、合計 25 名

調査期間：2004 年 5 月～7 月及び 2005 年 7 月～12 月

調査協力機関：財団法人「がんの子供を守る会」

インタビュー方法：半構造化面接

インタビュー時間：1 時間半～3 時間

インタビュー回数：1 回（ただし 1 名については約 1 時間の追加インタビュー）

インタビューガイド

- ・ 子どもの異変に気づいてから診断が確定するまでについて
- ・ 闘病中について
- ・ 子どもが亡くなった時のことについて
- ・ 亡くなった後のことについて

データ源：録音したインタビュー内容

親自身から提供された闘病記録、手記や日記

インタビュー後に送られた手紙やメール

6. 分析焦点者の設定

小児がんの子ども看病を主として自分自身が、あるいは、配偶者と同等程度担った末、子どもを亡くした親

7. 分析ワークシート

5 例の概念について分析ワークシートを提示した

8. カテゴリー生成

コアカテゴリー (2) サブカテゴリー (6) カテゴリー (3) 概念 (28)

9. 結果図とストーリーライン

結果図を提示しながらストーリーラインの説明を行った

II. 質疑応答

1. 分析テーマについて

分析テーマが大きすぎる。もっと絞り込む必要がある。

2. 分析焦点者について

母親だけではなく、あるいは、父親だけでもなく、母親と父親の両方を含めて対象の多様性を広く取り上げようとするのであれば、分析焦点者の規定の仕方をもっと明確

にしなければならない。

3. 結果図の中でポイントになる部分についてはもっと掘り下げていく必要がある。
4. 母親と父親の同じところと異なる部分を結果の中に反映させるほうがよい。
5. 分析ワークシートのヴァリエーションの中でも、母親と父親のどちらであるかを示さなければわからない。
6. 理論的メモについて
概念から概念への変化を理論的メモに記して、それを分析の中で確かめていく必要がある。
7. 配偶者など、亡くした対象が子ども以外の場合と比較して、子どもを亡くした場合特有のことが出ていない。

Ⅲ. 感想

今回、研究発表の機会を与えていただき、木下先生をはじめ、皆さまから多くの貴重なご意見やご助言をいただきましたこと、心より感謝いたしております。データをみていく上では、分析テーマと分析焦点者をできる限り絞り込んで明確にすることが何よりも重要であること、この2つの視点が曖昧なままで分析を進めてしまうと、出てくる結果も全体としてまとまりがないものになってしまうことを改めて痛感いたしました。ご指摘いただきました点をもとに、再度、データに向き合い、研究を深めていきたいと思っております。本当にどうもありがとうございました。

【研究報告 2】

小中学校教員への構成的グループ・エンカウンター実施の効果に関する研究

—研修への参加から現任校での実施を通じての生徒観や教育観の変化のプロセス—

福島哲夫 大妻女子大学、石田多枝子 海老名市青少年相談センター

1. 研究テーマ

これまで構成的グループエンカウンター（以下：SGE）の研究は多数されており、有効性が確認されている。しかしSGEを受講した教員がどのような体験を経て現任校で生徒たちに実施し、それがその教員の教育実践全体にどのような影響を与えているかということについての研究は少ない。

発表者らは教員への支援の一環として児童・生徒理解及び学級づくりを目的としたSGEの研修を平成10年より実施してきた。各教員がこの研修を体験した後に現任校で児童・生徒に実践するという目的での研修受講ではあるが、教員自身が研修を通して様々な体験を積んでいる様子が伺われた。教員がSGEの研修に参加し、クラスでの実施を通して、教員自身は何を体験してどのように変化したのかを明らかにし、その変化が教育実践に与える影

響を検討していきたい。

2. 現象特性

小中学校の教員がSGE研修に複数回参加し、さらにそれを本務校の児童・生徒に実施することによって教員自身が変わり、その教育実践に様々な影響や変化が生じると考えられる。具体的には、自己観・生徒観・教育観が変わると考えられ、それは単なる「スキルの習得と実践」でありながらも、それを越えた「より大きな変化」のプロセスでもある。

3. M-GTA に適した研究であるかどうか

教育の現場はまさにヒューマンサービスの現場であり、さらに本研究の対象はSGE研修会の講師と参加者、さらに参加者と現任校の他の教員や児童生徒との相互作用プロセスに関する研究であることから、M-GTA が本研究の手法として適していると考えられる。

本研究で明らかになったことは、単にSGEという手法のより効果的な導入という点にとどまらず、より効果的な研修内容や方法の模索、さらには教育現場における指導・教育方法や教員同士の連携・関係向上の具体的な提案として還元していけるものと考えている。

4. 分析テーマへの絞込み

研修や実施を通して、自己への気づき、生徒への新しい視点・認識の獲得、新しい技能の習得にともなう教員自身の変化へと至るプロセスを検討する。

5. データの収集法と範囲

- 1) 対象：中学校教員 12人（男5人、女7人）、年齢：20代～50代
- 2) 実施日：2004年10月10日～2005年3月11日、2005年9月～2006年3月
- 3) 手続き：半構造化面接を行なった。分析には、テープ録音の許可を得て、面接の逐語録を作成し用いた。

6. 分析焦点者の設定

発表者らの研修を受講した経験が3回以上あり、クラスで構成的グループ・エンカウンターを実践している公立中学校の教員。

5. 結果と考察

上記のような分析の結果36個の概念が生成され、それらが13のカテゴリーにまとめられた。その中でも特に重要と思われたカテゴリー6つをコアカテゴリーとした。そしてこれらのカテゴリーがプロセス性を伴った結果図として表現された。以下にその主なものを挙げる。

まず、参加の動機として、とにかく体験してSGEを習得したいという「体験して習得したい」や「リーダーシップ研修の必要性」を感じたり、普段忙しくてあまり交流できない教員同士が「普段とは違う教員同士の交流」ができるため、また、その交流を通じて「自分や他者を振り返るチャンス」としてという研修参加の動機付けがある。これらをまとめて【体験・

習得欲求】のカテゴリーとした。

研修参加の結果「自然に心が開けた」という自己開示体験のスムーズさを語る内容や自己探求・自己成長につながるような「自己内省」、体験型の研修ならではの「情動・共感体験」なども見出され、これらをまとめて**【教育カウンセリング的効果】**とした。さらに、このような体験の結果として友人関係や家族関係が変化するなどの**【プライベート領域への影響】**も見られた。

また研修に参加した結果「集団で交流したい」とか、今までは単なる興味の対象だったSGEが現実的に実施できるものとして位置づけられる「興味から実施へ」という変化や、研修参加によって「有効性と必要性の再確認」がなされるという現象が見られ、これらが**【実施への動機づけ】**とカテゴリー化された。

さらに研修参加によって講師のやり方を直接見て「聴く技術、話す技術の向上」が起きたり、「机間巡視・服装（に関する学び）」や「リーダー役割の再認識」などの**【モデリングによるスキルアップ】**が見られた。

研修参加により上記のような体験をし、その後、現任校で自ら実施すると、今度はSGEの実施を通じて**【教員同士の学びあいと支えあい】**が生じたり、**【生徒同士の関係促進】**の変化が見られたりする。この**【生徒同士の関係促進】**のカテゴリーの中には「なごみと凝集」「暖かい視線の増加」「生徒の新たな一面が発現」「生徒の自己理解・他者理解の深まり」などが含まれる。

また、その一方で「学級のなごみすぎ」やクラスや個人に合ったプログラム選定の難しさ」「感情表出促進の難しさ」などの対極的概念も生成された。これらをまとめて**【アセスメントの難しさ】**と命名した。これはこれらの難しさが学級や生徒個人に合ったプログラム選定の難しさから来ていると解釈されたためである。またこのカテゴリーは**【生徒同士の関係促進】**とは対極的なカテゴリーであると考えて図示した。

これらのプロセスを経て、さらに「（教員自身の）心のゆとりと自信」や「自分自身がポジティブになれた」などの**【（教員自身の）在り方の変化】**があることが明らかになった。

また、グループへの着眼点として「結果からプロセスへ」と視点が変化したり、「生徒への視点の変化」「価値観の多様化」などの**【視点・認識の変化】**が見られた。

次に「同僚の理解を得にくい」や、SGE実施や準備の「負担の集中化」、他の業務との兼ね合いでなかなか実施できないという気持ちである「多忙化とストレス」、さらには学校内や保護者のSGEに対する「誤解や無理解」「実施前の準備の大変さ」などのネガティブな側面も見出された。これらを**【実施・導入のストレスと負担増】**としてカテゴリー化した。さらにこのカテゴリーは、上記の**【在り方の変化】**とは対極的なカテゴリーと解釈し図示した。

上記のようなプロセスの結果、「生徒とのコミュニケーションの円滑化」が起きたり、授業における「グループ学習の積極活用」、リーダーシップ不足などの「個人的資質を補ってくれる」という効果も見出され、これらを**【教育力の向上】**としてカテゴリー化した。

それと同時にSGEの「質をどう高めていくか」、今後の「研修会への期待」など、主にSGE

の目的や方法、効果をいかに言語化して、周囲や対象の生徒の理解を深めていくかという課題も見出された。この課題は【課題と説明責任】としてカテゴリー化した。

6. 主なコメント

- ・スキル獲得とコミュニケーション体験の相互作用による変化というところにもっと踏み込んだ分析をしたほうが良い。
- ・全体の流れを統合する視点が欲しい。
- ・本当のコア概念はどれなのか？【教育力の向上】なのか？
- ・研修なのだからスキルアップというところにこだわった方がいいのではないか？
- ・教室の中でどのようなことが起こり、変化につながっていったのか？
- ・他の研修と違ってSGEならではのところにポイントを置いた方がいいのでは。
- ・「生徒はこう感じるた」という体験そのものをもっとアピールできる結果図にした方がいいのでは？
- ・結果図が、まさに結果を表現するものになってしまっていてプロセス図になっていない。
- ・SGEに参加することで何がおきたのかをもっと明らかに。
- ・具体的に教員のどんな体験が、その後の変化につながったのか？

(まとめのコメント)

- ・おもしろいテーマだが、全体が繰り返される重層的な体験を分析しようとしているので、分析が難しい。
- ・今回の分析は、一応分析テーマには沿ったものである。したがって、上に指摘されたようなさまざまな分析焦点はまた別の論文で当てるのもいいかもしれない。

7. 発表者の感想

いろいろな角度からのコメントをいただくことで、このテーマの難しさを実感したと同時に、興味関心をもたれるテーマでもあるのだと再認識できた。ご指摘いただいたミクロな視点マクロな視点ともに、絞り込んでいくつかの論文にしていきたい。

【構想発表1】

終末期看護に携わる看護師の死生観形成のプロセス

日本赤十字看護大学 大西潤子

1. テーマ設定の理由と研究目的

「終末期看護」は、単なる方法論であってはならない。なぜなら看護の対象となる終末期それぞれの人には、各の人生をふまえた個別的な最期があるはずだからである。それぞれの人の個性とは、生き方、考え方、何を大切に生きてきたかという価値観であったり、

死のとらえ方、その死の受け入れ方、死後の世界の存在や何を信じて希望とするか等。すなわち個別の「死生観」である。一方、その様な個別の「死生観」を持つ終末期の人々を看護する看護師もまた、個別の価値観を有する存在である。看護師は、個人の経験する人生に加え、看護師として体験した様々な臨床経験をも有している。看護師の「死生観」は、その様な中で形成されていく。

しかし、現実には終末期看護に携わる看護師には「終末期患者との関わり」からのストレスも多く、(和田, 1992) また、終末期の看護において看護師に死の恐怖が生じると、それへの防衛のために患者とのコミュニケーションができなくなる。(河野, 1988) ともいわれている。終末期看護においては、看護者自身が強い無力感・喪失感からストレスや外傷を負わないためと、逃げの姿勢ではなく質の高い終末期ケアを提供するために確固たる死生観を持つことが勧められている。(岡本他, 2005)

先行研究で死生観は、終末期の対応への影響要因の一つとして扱われることが多く、(吉田 1999, 二渡他 2003) それ自身の変化や看護師としての経験の中での形成過程を明らかにしている研究は少ない。本研究では、より質の高い終末期看護を提供するために看護師が持つべきとされる「死生観」がどのように形成(発展・成長?) されていくのかを明らかにすることを目的とする。

死生観：死や生のとらえ方。

死や生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む。
行動への準備体制。

2. M-GTA に適した研究であるかどうか

終末期の看護は、患者はもとよりその家族、ケアチームなど施設内の人々との直接的なやりとりの中で展開される。さらに死生観は、患者の死にゆく過程を看護するという経験だけでは、生成されない。経験の質や意味づけが重要である。(成田 1999, 野戸 2002) といわれることから、死生観形成のためには、能動的なフィードバックの回路が必要である。また、形成とは変化・成長というプロセス的な性格を持つ事柄であり、研究のめざす方向は、質の高いヒューマンサービスである。ただ、認識や感情の動きに関しては、変化が直接見えにくく、現象特性が捉えにくい可能性がある。

3. 現象特性

死に対する認識は様々ではあるが、大きく分けて否定的なイメージを持つものは、死にゆく人のそばにいたり死に対する話題を避け(自己防衛)、肯定的なイメージを持つものは、自分の死を含め死の話題を拒まず、死にゆく人に対するケアを積極的に行う傾向がある。

4. 分析テーマへの絞込み

日々終末期患者のケアに携わっている看護師が現在の死生観を獲得するまでに、経過してきた自身の気持ちや感情や意識的な関わりについて、生きることや死ぬこと(死生観)を視点に語った内容。

5. データの収集法と範囲

- 1) 対象：ホスピス、緩和ケア病棟に3年以上勤務経験のある看護師延べ6名(現在のべ10名程度を予定)
- 2) 分析データ：一人について25～60分のインタビューを行った。インタビューの内容は、印象的な患者およびそのケアにまつわるエピソードを自由に話していただく。その後その時の気持ちや感情を語っていただいた。基本的には、死生観の定義を示し、被調査者が思いつくことを何でも語っていただくこととした。
- 3) 調査期間：2006年8月～現在進行中
- 4) 調査方法：看護師には、個室で1回に60分以内のインタビューを行った。研究の趣旨を説明し、許可を得て録音し逐語録を作成して分析を行った。

6. 分析焦点者の設定

対象：ホスピス、緩和ケア病棟に3年以上勤務した経験のある看護師
 <3年以上の理由>
 看護の自律性に関する報告で、臨床を経験した看護師は自律性の要因である知的能力、実践能力、具体的判断能力、抽象的判断能力、自立的判断能力いずれも、経験3年を境に大きく高まる(菊池, 1997)といわれていることからホスピス・緩和ケア勤務についても3年以上とした。

インタビュー対象者

ID	年齢	看護職歴	ホスピス病棟 歴	宗教	インタビュー時間
1A	50	8年4か月	3年4か月	C	40分
2B	50	29年	6年5か月	C	44分
3C	35	13年8か月	4年8か月	M	27分
4D	30	9年8か月	4年5か月	M	50分
5E	43	20年8か月	7年8か月	M	53分
6C	35	13年8か月	4年8か月	M	22分

宗教：C(キリスト教)、M(無宗教)

7. 分析ワークシート：別紙

<参考文献>

- ・二渡玉江、入澤友紀、碓井真弓他 2003：終末期患者に関する看護師の意識および行動に関連する要因の検討 がん看護 8(3) 241-247
- ・菊池昭江、原田唯司 1997：看護の専門的自律性の測定に関する一研究 静岡大学教育学部研究報告 47 241-245
- ・成田小百合 1999：看護婦の臨死看護体験と死生観 神奈川県立看護教育大学校看護教育科、看護教育研究集録 看護教育学科 24 27-33
- ・野戸結花、三上れつ、小松万喜子 2002：終末期ケアにおける臨床看護師の看護観とケア行動に関する研究 日本がん看護学会誌 16(1) 28-38
- ・岡本双美子、石井京子 2005：看護師の死生観尺度と尺度に影響を及ぼす要因分析 日本看護研究学会雑誌 28(4) 53-60,
- ・吉田みつ子 1999：ホスピスにおける看護婦の「死」観に関する研究ー“良い看とり”をめぐるー 日本看護科学学会誌 19(1) 49-59
- ・和田恵子 1992：ホスピスケアにおける看護婦のストレス ターミナルケア 2(5) 303-307

8. 質疑応答・コメント

- ・ インタビュー対象者の表に示す宗教の表示について
→C(キリスト教)、M(無宗教)：表中に示した。
- ・ 面接時間が短いのではない。面接内容の組み立てを考えて、話してもらった方がよいのではない。
→今回までの対象者は、勤務時間内に制限のある中で面接を施行した。今後は、時間と面接ガイドを考慮してインタビューを計画していく。
- ・ 死生観形成をみるスタートとエンドポイント
死生観は、小児期から形成され始める。本研究のスタートはどこか。
→看護師になってからと考えている。したがって「形成」に当たる言葉を成長・発展・変化などにするか検討中である。
- ・ 死生観の人称：死生観は、一人称・二人称・三人称が必ずしも一致していない。
どのように分けてみていくか、絞っていくか。
→臨床経験があっても、一人称の死を捉えられていない看護師もいると感じている。人称性も考慮に入れて分析を勧めていくこととする。
- ・ 現象特性
ホスピス Ns の現象特性としては、繰り返し死の(看とり)体験をしていることがあるのではない。死生観の変化をみると看護師になってからでは、焦点が絞りにくくなるのではない。死の(看とり)体験の量によって、違いがあるのではない。
→研究の動機は、死生観の変化をみることである。対象がホスピス Ns であることから、必然的に繰り返し死の(看とり)体験をしているが、期間を限定することで知りたかったことがわかるかは、現時点で判断できない。検討課題とする。
- ・ ホスピスでの看護の対象者
終末期看護の対象者は「がん」か「高齢者」か。がんであれば、「がん病棟における・・・」などと絞った方がよいのではない。
→「がん」である。限定していく。

- ・ 死生観の定義

死生観が形成された状態はどのような状態か。対象者は死生観を持っていると認識しているのか。

→死生観の完成された状態はない。ただ、死生観を考えることにより、患者と相対することが可能になることが看護者に求められている。その様なことから逃げたり傷ついたり、バーンアウトにならないで、3年以上ホスピスに勤務した看護師が、どのような経験を経ながらどのようなことを考えてきたかを明らかにしていこうと考えている。

〈木下先生のコメント〉

- ・ 「死生観」は、分析テーマのレベルでは大きすぎる。分析テーマ自体を説明しなくてはならなくなるのはさけない。具体的に「(他でもなく)この人たちを対象とすることで、立てられる問いは何か」を考えるべきである。また、聞き方としては「死生観」という言葉と定義を提示し、それ理解を前提に話してもらうのでは負担が大きくなるので、自身の経験や思いなどをできるだけそのままが自由に語ってもらえる聞き方がよいのではないか。
- ・ テーマの独自性、意義の検討が十分だろうか。「死生観」をめぐる先行研究はそれなりなあるのではないか(終末期ではないが)。もっと文献レビューをしっかりとしてほしい。

(ワークシート作成時の疑問に対して)

- ・ 一つの概念の中にプロセス(時間的経過)が含まれても問題はないか。
- ・ 語る人が意図しない言葉の内容を複数に解釈して、別の概念に用いて良いか。

→いずれも問題はない。大切なのは、ワークシートの作成を単なる作業とせず、自分の解釈を形にすることである。概念名「スピリチュアルな問いかけをする患者に抱く思いと行動」のヴァリエーションで大事なものは、「少し余裕って言うものはあの、出てきたと思います」の余裕が何なのかに注目すること。分析対象者をしっかり定めておくと、その余裕が何なのかに注目できる。「余裕」はある変化を語っているし、死生観とも関わっている。解釈上の問いが浮かばないまま作業だけを先行していくと、データから不用意に離れていってしまう。問いを理論的メモに残していくことにより、データ解釈が広がり概念が深まっていく。

この概念ではこのヴァリエーションが必要だというものを持ってくることで、結果的に一ヴァリエーションが複数の分析シートに使用されることはあるが、重複使用自体は些末な問題で、解釈内容に集中してほしい。ヴァリエーションを複数のシートに使う場合には、どのような位置づけで使うのかをどこかにメモしておくといい。

9. 感想

発表させていただくことにより、自分の考えていたことを客観的に見直すことができました。今後、死生観の具体化や分析ワークシートの作業化から本来の分析化への転換など、分析テーマと分析焦点者を再検討した上で、分析を進めていきたいと思います。木下先生始め皆様の貴重なアドバイスやご意見に、感謝いたします。ありがとうございました。

【構想発表2】

韓国の日本人短期留学生の異文化体験

—韓国及び韓国人に対する認識の変容プロセスを中心に—

岩井朝乃(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程)

1. M-GTAに適した研究か

- ・異文化間コミュニケーション研究は、文化的背景を異にする人々の相互作用とその解釈を研究の対象としており、M-GTAを研究方法として適用できる分野の一つである。
- ・本研究が分析の着眼点とする日本人留学生の韓国や韓国人に対する認識は、主に韓国人との相互作用を通じて形成される。ある認識の変容はプロセス特性を備えているため、本研究はM-GTAに適していると考えられる。

2. 研究テーマ

韓国の日本人短期留学生の異文化体験—韓国及び韓国人に対する認識の変容プロセスを中心に—

目的

韓国に留学する日本人は、韓国及び韓国人をどのように認識し、理解するのか。

その認識の変容プロセスを明らかにする。

テーマ設定の前提

国内での異文化接触による文化的他者認識の変容過程(岩井、2006)と、国外での異文化体験による認識形成・変容プロセスを比較する。

⇒大学における異文化間教育(大学内での異文化交流デザイン・国外への派遣留学プログラム)への貢献

日韓の相互認識を、韓国を体験する日本人留学生の視点から明らかにする。

⇒アジア、特に日韓の異文化間コミュニケーション研究への貢献

3. 現象特性

青年の異文化体験では、既に確立された自文化の認識や考え方を基盤にした上で、新たな

文化をどのように認識し、理解していくのかという観点が重要となる。

韓国に留学する日本人は、マスメディアの情報、韓国人との出会い、旅行・研修体験、韓国語学習など韓国に対する関心を深めて留学を決意すし、留学中には現地での経験や韓国人との相互作用を通じて、韓国及び韓国人に対する認識を複合的に形成し、変容させていく。本研究が対象とする日本人は、2004 年以降の韓流ブームを経験しており、日韓関係における新世代と見ることができるが、日韓両国が依然として歴史認識、領土問題という衝突の種を抱えていることに変わりはなく、留学中には愛憎入り混じる複雑な感情を体験すると予想される。また日本人と韓国人は外見、食習慣や言語的特性、文化的な意味体系においても類似性が高い一方、異質性も際立っている。このような関係の隣国での異文化体験は、異人種、全くの異文化を最初から了解していく欧米での体験とは異なる可能性が高いと言えよう。

4. 分析テーマへの絞込み

調査進行中のため、現在検討中。(韓国に留学する日本人は、韓国及び韓国人をどのように認識し、理解するのか。その認識の変容プロセスだが、どこまで細かくテーマ設定するかは検討中)

☆認識のみを軸にカテゴリーを生成するか、ある認識に対する感情を軸にするか。

Ex: 「率直な物言い」という対韓国人認識に対して、「いいと思う(肯定)」「驚いた(評価なし)」「嫌(否定)」「最初は嫌だったけど、今は理解している(変化)」という複数の感情レベルでの反応があるが、これをどのようにするか。

5. データの収集法と範囲

分析対象 韓国に一年程度の留学を予定している 20 代前半の日本人

平均年齢 21.2 歳 / 20 歳～25 歳(調査開始時点)

男性 4 名、女性 8 名

・半構造化面接

調査期間 2006 年 8 月～2008 年 4 月(事前・3 ヶ月・6 ヶ月・帰国 1 ヶ月前・帰国後の 5 回)

6. 分析焦点者の設定

現在検討中

(追記) 一ヶ月以上の海外経験を持たず、韓国に 1 年間留学する 20～25 歳の日本人

7. 分析ワークシート

「葛藤の源としての歴史認識・領土問題」(別紙)

8. カテゴリー生成（別紙）

<質疑>

Q：面接を5～6回設定しているが、これは必要があるか。細かい時間的な区切りは、M-GTAという研究方法に馴染まないのだが…。

A：異文化に対する解釈は時間と共に変化する可能性があるので、時間的な区切りによるインタビューを取り入れた。また、異文化適応という観点もあるため、縦断的な調査が必要だと考えたが、テーマが広すぎるかもしれない。研究方法に合うかどうか再度検討したい。

Q：（上の指摘に関連して）経験を振り返る語りでも、プロセス性は出せるので、表層的な時間による異なりはあまり重要ではないが。

A：確かに、実際に行ったインタビューで過去を振り返る際には、どの時点から思うようになったかということは確定しにくく、結果図にも厳密な時間の異なりは出しにくい。もう一度検討する必要がある。

Q：縦断的に複数回データを取るなら、個々の事例は事例研究としてまとめ、最後に留学生生活を振り返った語りをM-GTAでまとめて全体図を示すというやり方はどうか。

A：これまで、そのようなまとめ方を考えていなかったが、参考にしたい。

Q：テーマが『認識の変容』では、一般的過ぎるのではないか。何かは出てくるだろうが、もっと分析テーマを絞った方がオリジナルな知見が出るのでは。

A：確かに、広いテーマだと思う。認識の全体像を示したいという思いもあるが、データを見ながら、テーマを絞れるか、絞るならどのような観点が良いか検討したい。

Q：研究1（国内での異文化接触）と研究2（日本人留学生の韓国認識）のつながりが見えにくい。研究1のコアカテゴリーを研究2でも使うならば流れが見えるのかもしれないが…？

A：研究1について十分に説明することはできなかったが、つながりを分かりやすく示せるように工夫したい。

<感想>

根本的な点でのご指摘もいただき、研究計画を再考する契機となった。まず先行研究と自分の問題意識をしっかりと見据えて、テーマ設定、研究計画全体のつながりをつめていく必要性を感じた。また、自分のテーマに最も適した研究方法、分析方法、まとめ方を再度検討しなければならないことに気づき、具体的な助言などもいただけて、非常に勉強になった。課題は多いが、一つ一つ着実に取り組んでいきたい。

このような機会を与えていただいたこと、また多くのご意見、ご指摘に大変感謝しております。どうもありがとうございました。

【編集後記】

- ・第39回研究会の記録です。報告された皆さん、短い時間に原稿をまとめていただきありがとうございました。研究会から少し時間をおいて、こうしたまとめをするのは自分の研究を確認する機会にもなるのではないのでしょうか。
- ・忙しい、忙しいの生活が日常化していますが、年度が変わるときくらいは少し気持ちに余裕を持って（これが実にむずかしいのですが）、この一年を振り返り、これからの一年に思いを馳せ、自分の立ち位置を確認したいと思っています。
- ・これは研究会についても言えることで、総会で具体的な提案を検討していただけたと思います。
- ・研究の成果を論文に発表された方は、その情報をお知らせください。また、連絡先に変更のある方は事務局の佐川さんにお知らせください。

（木下記）